

給食実務学外実習の実態調査 第5報

— 栄養士養成課程の校外実習から管理栄養士養成課程の臨地実習に向けて —

松森 慎悟 籾 早苗 三浦 麻子 太田 信子 篠原 能子

Investigation of Actual Conditions of Food Service Field Practice [V] — From the Field Practice in the Training Course of the Dietitian Aiming the Field Practice in the Training Course of Registered Dietitian —

Shingo MATSUMORI Sanae EBIRA Asako MIURA
Nobuko OTA Yoshiko SHINOHARA

本学は平成21年度より管理栄養士養成施設として人間健康学部健康栄養学科を開設し、既存の短期大学食物栄養科は平成21年度をもって閉設することとなった。これまでは短期大学の栄養士要請施設とし校外実習を行ってきたが、平成23年度からは管理栄養士要請施設として臨地実習を実施していかなければならない。そこで平成21年度を含めた過去3年間の学生や実習施設を対象としたアンケート調査を基に臨地実習における指導の参考にするにも視野に入れて報告する。学生の自己評価（以下自己評価）は年度間において有意な差がみられ、施設先の成績評価（以下施設先評価）は年度間での有意な差がなく、毎年ある程度同じ評価をつけていることが分かった。また、自己評価と施設先評価の相違点や各施設による相違点などがみられ、特に「積極性」では各年度において、また施設別では学校・児童福祉施設・高齢者福祉施設学内において有意な差がみられ、今後指導する上で学生が積極的に動けるよう検討する必要がある。また、「衛生観念」に関しても平成20年度及び平成21年度において施設先評価が有意に低値を示し、また、施設毎にみても自己評価より施設先評価が下回るという認識のずれが生じており、衛生管理に関する指導を強化する必要がある。今後臨地実習を効率よく運営するためにこれまで得られた幾つかの報告を踏まえた上で新たな指導計画を立て、学生にとって充実した臨地実習が行えるように取り組んでいきたい。

キーワード：学内実習、校外実習、給食の運営、臨地実習

1. はじめに

本学は平成21年度より管理栄養士養成施設として人間健康学部健康栄養学科を開設し、既存の短期大学食物栄養科は平成21年度をもって閉設することとなった。著者らはこれまで短期大学の栄養士養成施設として校外実習の指導に取り組みその結果を調査・報告してきたが^{1)~4)}、今後は管理栄養士養成施設において臨地実習の指導に取り組みこととなる。

ここでこれら2つの実習の定義を明らかにしておきたい。栄養士法の一部改正により、社団法人日本栄養士会と社団法人全国栄養士養成施設協会は平成

14年4月1日付けで文部科学省および厚生労働省より通知された「管理栄養士養成施設における臨地実習及び栄養士養成施設における校外実習要領」の内容を踏まえた上で、「臨地・校外実習の実際－改正栄養士法の施行にあたって－」を作成している。これによると校外実習は、栄養士養成に必要な実習単位である「給食の運営」を、給食現場における実践を通して「給食業務を行うために必要な食事の計画や調理を含めた給食サービス提供に関する技術について、実践的に習得する」ために行う実習であるとの記載がある⁵⁾。一方「臨地実習」については、「実

実践活動の場での課題発見、解決を通じて、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図る。」ために行う実習であるという記載があるが、校外実習にもあった「給食の運営」に加えて「給食経営管理論」、「公衆栄養学」、「臨床栄養学」といった3つの分野がある他、内容、施設、および期間などについても詳細な指示があり、指導者としては注意深く指導要項を計画する必要があると思われた。

これら2つの実習の違いをよく踏まえ、これまで実施してきた校外実習を考慮しつつ、教育効果の高い「臨地実習」を行えるよう検討し、学生指導に当たらなければならない。そこで平成21年度を含めた過去3年間の学生及び実習施設の指導者を対象としたアンケート調査を基に臨地実習における指導の参考にすることも視野に入れて報告する。

2. 調査対象と方法

1) 調査対象及び調査方法

自己評価においては、調査対象は平成19年度から平成21年度の駒沢女子短期大学食物栄養科の2年生(210名)で、各年度の実習終了後に授業時間内にてアンケート調査を実施した。調査方法は9項目に対して5段階評価で回答させた。さらに同用紙にて別項目においても5段階評価で回答させた。施設先評価についても、平成19年度から21年度の駒沢女子短期大学食物栄養科の2年生(210名)で、調査方法は6項目に対して5段階評価で回答を求めた。なお、各調査の集計・解析はExcel 2007を用いて、各種検定及び分散分析を行った。

2) 調査内容

自己評価では、礼儀作法、積極性、責任感、衛生観念、協調性、事務整理、遅刻・欠席、健康管理、総合評価の計9項目に対して、5(大変よく出来た)、4(よく出来た)、3(普通)、2(あまり出来なかった)、1(出来なかった)、という5段階評価で学生自身が主観的に自己を評価した結果を回答させた。この内、施設先評価と同一項目である6項目において比較・検討した。また別項目として「給食運営の実際を知ることができたか」という質問にも5段階評価で回答させた。施設先評価では、礼儀・作法、積極性、責任感、衛生観念、協調性、総合評価の計

6項目に対して、5(大変よく出来た)、4(よく出来た)、3(普通)、2(あまり出来なかった)、1(出来なかった)、の5段階評価で施設の責任者による学生の評価について回答を求めた。

3. 結果及び考察

学生人数の年度毎における施設別一覧表を表1、その構成比を図1に示す。まず「学校」において平成19年度では30.9%であったのに対し、平成20年度及び平成21年度では8.6%及び13.6%と大きく減少しているが、これは平成19年度までは、学生自身が近隣の施設を探し、直接依頼して実習を実施することが可能であったため、母校で実習を実施した学生が多くいたことが原因である。しかしこれでは、地方の学生の場合指導者が施設と疎遠になりがちなこと、また施設側が実習生の受け入れが初めてであることも少なくなかったため、実習内容の把握や施設指導

表1. 実習施設別学生数

施設	平成19年度		平成20年度		平成21年度		合計	
	学生数(人)	構成比(%)	学生数(人)	構成比(%)	学生数(人)	構成比(%)	学生数(人)	構成比(%)
学校	25	30.9	6	8.6	8	13.6	39	18.6
児童福祉施設	20	24.7	21	30.0	14	23.7	55	26.2
高齢者福祉施設	4	4.9	12	17.1	5	8.5	21	10.0
事業所	23	28.4	24	34.3	21	35.6	68	32.4
病院	9	11.1	7	10.0	11	18.6	27	12.9
合計	81	100	70	100	59	100	210	100

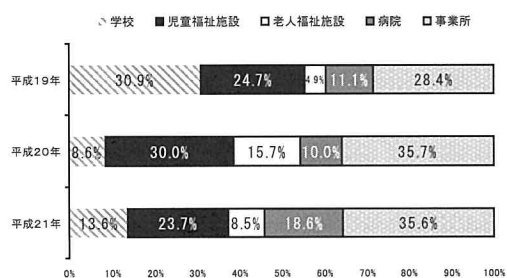


図1. 学生人数の施設別構成比

者との連絡が適切に行えず効率が悪かった。したがって平成20年度からは、本学が用意した施設の中から学生に第2希望までのアンケート調査により実習先を決定しており、ほぼ全員が第一希望の実習施設で実施している。そのため平成20年度及び平成21年度では学校が減少した分事業所が増えているが、その他の施設に関しては年度による大きな差はみられなかった。

表2. 各評価における年度別比較の相違

		自己評価					上段:mean、下段:±SD
年度	礼儀・作法	積極性	責任感	衛生観念	協調性	総合評価	
H19	3.69 ±0.83	3.21 ±0.79	3.78 ±0.79	3.73 ±0.63	3.75 ±0.78	3.60 ±0.68	
H20	4.07 ±0.67	3.47 ±0.86	4.20 ±0.88	4.19 ±0.60	3.90 ±0.80	3.97 ±0.61	
H21	3.97 ±0.87	3.54 ±0.79	3.93 ±0.78	4.09 ±0.57	3.83 ±0.88	3.85 ±0.61	
有意確率	*	*	**	***	n.s.	**	

*:P<0.05、** :P<0.01、*** :P<0.001、n.s.:有意差なし

		施設先評価					上段:mean、下段:±SD
年度	礼儀・作法	積極性	責任感	衛生観念	協調性	総合評価	
H19	4.10 ±0.78	3.58 ±0.86	3.83 ±0.80	3.68 ±0.82	4.05 ±0.72	3.93 ±0.70	
H20	4.16 ±0.83	3.79 ±0.90	3.94 ±0.76	3.83 ±0.70	3.94 ±0.78	3.91 ±0.69	
H21	3.95 ±0.90	3.86 ±0.90	3.92 ±0.73	3.63 ±0.76	3.86 ±0.71	3.95 ±0.73	
有意確率	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	

n.s.:有意差なし

次に各評価の年度別比較を表2に示す。有意確率をみると自己評価では協調性を除くすべての項目において有意な差が出たのに対し、施設先評価ではすべての項目において有意な差が得られなかった。このことから、施設先評価は施設や施設指導者の変更があるにもかかわらず、毎年ある程度同じ評価をつけていることが分かる。それに対して自己評価は学生が毎年変わりそれぞれ主観的に評価するのでバラつきが生じるのではないかと思われた。

つづいて各年度における評価間比較の相違を表3

表3. 各年度における評価間比較の相違

		自己評価					上段:mean、下段:±SD
年度	評価	礼儀・作法	積極性	責任感	衛生観念	協調性	総合評価
H19	自己評価	3.69 ±0.83	3.21 ±0.79	3.78 ±0.79	3.73 ±0.63	3.75 ±0.78	3.60 ±0.68
	施設先評価	4.10 ±0.78	3.58 ±0.86	3.83 ±0.80	3.68 ±0.82	4.05 ±0.72	3.93 ±0.70
	有意確率	**	**	n.s.	n.s.	*	**
H20	自己評価	4.07 ±0.67	3.47 ±0.86	4.20 ±0.88	4.19 ±0.60	3.90 ±0.80	3.97 ±0.61
	施設先評価	4.16 ±0.83	3.79 ±0.90	3.94 ±0.76	3.83 ±0.70	3.94 ±0.78	3.91 ±0.69
	有意確率	n.s.	*	n.s.	**	n.s.	n.s.
H21	自己評価	3.97 ±0.87	3.54 ±0.79	3.93 ±0.78	4.09 ±0.57	3.83 ±0.88	3.85 ±0.61
	施設先評価	3.95 ±0.90	3.86 ±0.90	3.92 ±0.73	3.63 ±0.76	3.86 ±0.71	3.95 ±0.73
	有意確率	n.s.	*	n.s.	***	n.s.	n.s.

*:P<0.05、** :P<0.01、*** :P<0.001、n.s.:有意差なし

に示す。まず「礼儀・作法」は平成19年度では自己評価と施設先評価の間には有意な差があり自己を厳しく評価していたが、平成20年度及び平成21年度では有意な差がみられず、学生自身も挨拶などは徹底して行えたと感じていると考えられる。これは第4報4)で報告した通り、平成19年度より学内指導に

て「礼儀・作法」を要指導強化項目として取り組んだのでその効果が得られたのではないかと思われた。「積極性」に関しては各年度において自己評価が有意に低く、積極的に動いていないと感じている学生が多くみられ、今後指導する上で検討しなければならない項目である。「責任感」は各年度で有意な差はなく、与えられた仕事に関しては最後までしっかりとやり遂げている事が伺える。「衛生観念」については第4報⁴⁾にて報告したように平成19年度で指導を強化し、その結果平成19年度の校外実習では自己評価と施設先評価の差が縮まり、ずれが解消されたが、平成20年度及び平成21年度では施設先評価が有意に低値を示し、今後改めて指導を強化する必要があると思われた。「協調性」及び「総合評価」では平成19年度では自己評価が有意に低値を示したが、平成20年度及び平成21年度では有意な差はなく、施設先評価とのずれは生じていなかった。全体を通してみると、平成19年度の学生は自己を厳しく評価しているが、平成20年度及び平成21年度では「衛生観念」を除く項目に関してはある程度出来ていると感じている学生が多いことが分かった。

これまで年度別に比較してきたが、施設毎の差を把握するため過去3年間の調査結果を施設別に累積集計し、各施設における評価間比較の相違を表4に示す。まず「礼儀・作法」についてはいずれの施設においても有意な差はみられなかったが、全ての施

表4. 各施設における評価間比較の相違

		自己評価					上段:mean、下段:±SD
施設	評価	礼儀・作法	積極性	責任感	衛生観念	協調性	総合評価
学 校	自己評価	3.95 ±0.97	3.23 ±0.71	4.18 ±0.72	4.05 ±0.63	3.95 ±0.73	3.82 ±0.60
	施設先評価	4.10 ±0.75	3.77 ±0.78	3.90 ±0.79	3.62 ±0.67	4.10 ±0.60	3.90 ±0.55
	有意確率	n.s.	**	n.s.	**	n.s.	n.s.
児 童 福祉施設	自己評価	3.76 ±0.82	3.24 ±0.65	3.62 ±0.87	3.82 ±0.62	3.55 ±0.83	3.60 ±0.68
	施設先評価	3.91 ±0.93	3.62 ±0.87	3.69 ±0.66	3.53 ±0.57	3.89 ±0.71	3.71 ±0.63
	有意確率	n.s.	**	n.s.	*	*	n.s.
高 齢 者 福祉施設	自己評価	4.14 ±0.65	3.67 ±0.91	4.29 ±0.78	4.14 ±0.74	4.10 ±1.00	4.00 ±0.71
	施設先評価	4.38 ±0.59	4.24 ±0.77	4.52 ±0.60	4.19 ±0.60	4.14 ±0.73	4.38 ±0.59
	有意確率	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
事 業 所	自己評価	4.01 ±0.72	3.56 ±0.84	4.07 ±0.82	4.10 ±0.59	3.96 ±0.76	3.96 ±0.63
	施設先評価	4.16 ±0.82	3.75 ±0.89	3.94 ±0.79	3.85 ±0.90	4.06 ±0.79	4.04 ±0.76
	有意確率	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
病 院	自己評価	3.59 ±0.75	3.30 ±0.82	3.81 ±0.79	3.81 ±0.64	3.67 ±0.73	3.59 ±0.57
	施設先評価	3.93 ±0.87	3.37 ±1.04	3.67 ±0.73	3.52 ±0.80	3.52 ±0.70	3.76 ±0.78
	有意確率	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

*:P<0.05、** :P<0.01、n.s.:有意差なし

設において自己評価より施設先評価が上回る結果となった。したがって学生が感じているよりもよくできていると評価されていることが伺える。「積極性」についてもすべての施設において自己評価より施設先評価が上回っており、この結果は前報までの結果と同様で、記述式アンケートからも積極的に動くことが困難であると感じる学生が多かった。特に学校・児童福祉施設・高齢者福祉施設において有意な差がみられ、病院では他の施設に比べ施設先評価が厳しい傾向であることが分かった。「責任感」については全ての施設において有意な差はなく、年度比較と同様に与えられた仕事は最後までしっかりとやり遂げたと感じる学生が多かったと思われる。「衛生観念」については全ての施設において自己評価より施設先評価が下回り、特に学校及び児童福祉施設では有意に低値を示した。このことからどの施設においても学生と施設との間に衛生管理意識のずれが生じていることが分かった。これは事故につながりかねない重要項目であるため今後さらに指導強化を徹底する必要があると思われた。「協調性」及び「総合評価」については全ての施設で有意な差はみられず、どの施設においてもずれは生じていなかった。全体を通してみると自己評価及び施設先評価ともに高齢者福祉施設で高く児童福祉施設と病院で低い傾向があった。これはこれまでの報告と同じ傾向であり、この理由としてまず病院については、利用者が傷病者であることから当然現場も厳しい管理が必要であるため評価も厳しくなったと容易に推測される。次に児童福祉施設については、利用者が児童で免疫力が弱くアレルギーもあるなど油断を許さない事は察しが付くが、すると同じく免疫力が弱く嚥下や咀嚼が困難であるなどさまざまな食形態で問題を抱えた利用者がある高齢者福祉施設で、なぜどの項目においても他の施設に比して評価が高いのか疑問が残る。実習施設の中で実習生の周りで起こっていることを把握するためにも、著者らは各施設の内部について知識を深めさらに施設指導者とコミュニケーションを密にし、場合によっては責任者の了承を得たうえで巡回とは別に実習風景を拝見する機会を設ける必要があると考えられる。

更に施設間の違いを把握するために、「給食運営の実際を知ることができたか」という項目における施設間比較の相違を表5に示す。学生には事前指導

表5. 別項目の施設間比較の相違

上段: mean、下段: ±SD	
施設	給食運営の実際を知ることができたか
学校	4.26 ±0.55 *
児童福祉施設	3.87 ±0.92 ***
高齢者福祉施設	3.90 ±0.70
事業所	3.57 ±1.15 *
病院	4.07 ±0.78

*: P<0.05、***: P<0.001

の一つとして幾つか目的を持たせて実習に行かせているが、最も多い目的は「実際の栄養士業務をみる」というものである。この目的がどの程度達成出来たかを把握するために、事後指導の一環として実施している実習報告会やこの項目に対する質問調査を行った。その結果、学校及び病院では高いことが分かり、逆に事業所では低い傾向であった。これは学校や病院では管理栄養士が配置されている施設が多く、他の施設に比べて食育や栄養指導の現場など実際の栄養士業務を知る体験が多かった事から学生からの評価が高くなったと思われる。一方、事業所では管理栄養士が配置されている施設はほとんどなく栄養士のみである施設が多い。また、栄養指導などの栄養士業務に力を入れている施設も少なかったため、学生からの満足度が低かったのではないかと思われた。

4. まとめ

平成21年度を含めた過去3年間の学生や実習施設を対象としたアンケート調査により、校外実習における自己評価と施設先評価の相違点や各施設による相違点などがみられ、特に「積極性」では各年度において、また施設別では学校・児童福祉施設・高齢者福祉施設学内において有意な差がみられ、今後指導する上で学生が積極的に動けるよう検討する必要がある。また、「衛生観念」に関しても平成20年度及び平成21年度において施設先評価が有意に低値を示し、また、施設毎にみても自己評価より施設先評価が下回るという認識のずれが生じており、衛生管

理に関する指導を強化する必要がある。

このように校外実習は学内で実施する実習とは異なり実習施設と言う「社会現場」における教育は、我々指導者にとっても学生らにとっても全ての取り組みにおいて施設の職員や利用者との兼ね合いが必要であり、新たな発見や気づきの多い良い経験となることが分かる。これまで校外実習で実施してきた「給食の運営」における実習経験や実態調査は平成23年度から実施する臨地実習において参考になると感じられた。

ここで今後取り組む「臨地実習」についてふれておきたい。社団法人日本栄養士会及び社団法人全国栄養士養成施設協会が作成した「臨地・校外実習の実際－改正栄養士法の施行にあたって－」に次のように示している。新カリキュラムにおける「臨地実習」の位置付けとして、「臨地実習」は、「実践活動の場での課題発見、解決を通して、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図る」ために行う実習であり、「学内で修得する知識・技術を栄養管理の実践の場面に適用し、理論と実践を結びつけて理解できること」をねらいとして「臨地実習」の充実強化を図ることとされた。特に、「栄養評価・判定が行われる場で直接人に接する実習を推進するよう、『臨床栄養学』を中心とし、『公衆栄養学』、『給食経営管理論』のいずれかで行う」とされ、「臨床栄養学」を重視した内容になっている。「校外実習」と「臨地実習」の違いは、「校外実習」で「給食の運営」について1単位（1週間）以上であるのに対し、「臨地実習」では「給食の運営」1単位に加え「臨床栄養学」を中心に計4単位以上が定められているため施設も複数経験することとなる。本学科では臨地実習Ⅰ・Ⅱが必修であり、臨地実習Ⅲが選択となっており、「給食経営管理論」及び「公衆栄養学」を含む「臨床栄養学」を中心としたカリキュラムが組まれている。これらの臨地実習を効率よく運営するためにこれまで得られた幾つかの報告を踏まえた上で新たな指導計画を立て、学生にとって充実した臨地実習が行えるように取り組んでいきたい。また、これまで校外実習で行ってきた実態調査を継続し、他大学の報告6）～11）などを考慮しつつ新たに臨地実習実態調査として実施していく必要がある。

5. 要 約

- 1) 学生人数の年度比較は、平成19年度では学校が多く、平成20年度及び平成21年度では事業所が多少増加傾向にあったが、その他の施設に関しては年度による大きな差はみられなかった。
- 2) 各評価の年度別比較では、有意確率をみると「自己評価」では協調性を除くすべての項目において有意な差が出たのに対し、「施設先評価」ではすべての項目において有意な差が得られなかった。
- 3) 各年度における評価間比較では、「礼儀・作法」は平成19年度では自己評価と施設先評価の間には有意な差があり自己を厳しく評価していたが、平成20年度及び平成21年度では有意な差はみられなかった。「積極性」に関しては各年度において自己評価が有意に低く、「責任感」は各年度で有意な差はなかった。また「衛生観念」については平成19年度では自己評価と施設先評価の差が縮まり、ずれが解消されたが、平成20年度及び平成21年度では施設先評価が有意に低値を示し、今後改めて指導を強化する必要があると思われた。「協調性」及び「総合評価」では平成19年度では自己評価が有意に低値を示したが、平成20年度及び平成21年度では有意な差はなく、施設先評価とのずれは生じていなかった。
- 4) 各施設における評価間比較では、「礼儀・作法」はいずれの施設においても有意な差はみられなかったが、全ての施設において自己評価より施設先評価が上回る結果となった。「積極性」についてもすべての施設において自己評価より施設先評価が上回っており、「責任感」については全ての施設において有意な差はなく、年度比較と同様に与えられた仕事は最後までしっかりとやり遂げたと感じる学生が多かったと思われる。「衛生観念」については全ての施設において自己評価より施設先評価が下回り、特に学校及び児童福祉施設では有意に低値を示した。「協調性」及び「総合評価」については全ての施設で有意な差はみられず、どの施設においてもずれは生じていなかった。

- 5) 「給食運営の実際を知ることができたか」という項目における施設間比較では、学校及び病院では高いことが分かり、逆に事業所では低い傾向であった。

6. 参考文献

- 1) 篠原能子, 松森慎悟: 駒沢女子短期大学紀要, 39, 75-81, (2006)
- 2) 松森慎悟他: 駒沢女子短期大学紀要, 39, 83-87, (2006)
- 3) 松森慎悟, 篠原能子: 駒沢女子短期大学紀要, 40, 87-95, (2007)
- 4) 松森慎悟他: 駒沢女子短期大学紀要, 41, 55-59, (2008)
- 5) 臨地・校外実習のあり方検討会:(社) 日本栄養士会, (社) 全国栄養士養成施設協会
- 6) 西村早苗他: 女子栄養大学紀要, 34, 115-121, (2003)
- 7) 西村早苗他: 女子栄養大学紀要, 35, 103-110, (2004)
- 8) 大出京子他: 尚絅学院大学紀要 55, 1-15, (2008)
- 9) 神田知子他: 山口県立大学生生活科学部研究報告29, 9-15, (2004)
- 10) 堀尾拓之他: 園田学園女子大学論文集38, 169-183, (2003)
- 11) 高橋千恵子: 国際学院埼玉短期大学研究紀要 27, 37-44, (2006)